平和への願いを次の世代へ

戦争を経験した皆さんが口をそろえて語るのは、「二度と戦争はやらないほうがいい」という平和への願いです。しかし、そんな願いもむなしく、世界では未だに戦争がなくなることはありません。
そんな中、戦争を知らない市内の中学生が、平和への思いを胸に活動を始めました。

繰り返される悲劇

今年2月、ロシアが隣国のウクライナに侵攻。両国は激しい戦闘状態となりました。日本から遠く離れた国の出来事ですが、多くの人が戦争の悲劇を目の当たりにし、心を痛めました。そんな中、市内でも戦争で被害を受けた人を支援しようと募金活動が行われ、世界の平和を願う、温かい支援の輪が広がりました。

平和を願う中学生の活動

4月26日、菊川西中学校の福祉委員会が、市役所へ募金を届けました。ロシアによるウクライナへの侵攻により、大きな被害を受けている人々を支援するため、4月18日から22日までの5日間、登校の時間を利用して募金活動を実施。各教室や廊下に自作したポスターを貼るなどの工夫をし、総額7万3,572円を集めました。

▲募金を呼び掛ける手づくりのポスターを手に長谷川市長と記念写真

福祉委員長の山崎紗羅さんは、「市がウクライナ支援の募金活動をしていると知り、自分たちもやってみようと提案しました」と、募金を行った経緯を説明。中学生がニュースで流れる戦争の報道に心を痛め、「自分たちにできることをやってみよう」と始めた活動でした。

平和への願いを次の世代へ

平和への思いから行動を起こした菊川西中学校の山崎紗羅さんと八木結奈さんの2人が、今回の特集の取材に協力してくれました。

2人はまず、市内に残る戦争の痕跡を見に行きました。普段通っている中学校のすぐ近くにある「舟岡山公園」の招魂社や、母校である六郷小学校の近くにある慰霊碑、防空壕を自分の目で見て、身近なところに戦争を伝えるものがあることを知りました。次に、戦争を体験した当事者に話を聞きに行こうと、遺族会の寺本達良さんの元を訪ねました。

当事者に聞く戦時中の暮らし

10歳の時に終戦を迎えた寺本さんは、当時の様子を2人に語ってくれました。「朝、学校に向かっているとサイレンが鳴り、空襲警報が出されると、子どもは家に帰らなくてはなりません。警報が鳴らずに学校へ行っても、みんなで運動場に作った畑の野菜を世話しました。勉強よりも、明日の食料が大切でした」と、戦時中は満足に勉強ができなかったことを教えてくれました。またある日は、浜松の市街地へ艦砲射撃があり、その砲弾の光が嶺田からも見えたと言います。「こっちに飛んでくるのではないかと不安になり、その日はみんなで家から逃げました」と、当時の状況を話してくれました。

▲真剣な表情で話を聞く2人

戦地へ赴く父の姿

寺本さんの父親は、昭和20年8月28日、シベリアで抑留中に栄養失調で亡くなったと

菊川西中学校
福祉委員会 副委員長
八木 結奈 さん
（打上）

当事者の気持ちを知り、思いをつなげたい

防空壕の見学や体験談を聞いて、教科書よりもずっと身近に戦争を感じました。以前はどこか他人事のような、本当にあったとは思えませんでしたが、菊川市だけでも多くの戦争の記憶が残っていることが分かりました。

最近では当時を語ることができる遺族の方が減っていると聞きました。遺族の皆さんの考えや思いが伝わらず、同じようなことが起こってしまう可能性があるのは、とても怖いことだと思いました。それを防ぐためにも、話を聞いた私たちが当事者の気持ちを知り、思いをつなげていくことで、少しでも多くの人に知ってもらいたいです。